

詠む広場

毎日俳壇

西村 和子 選

井上 康明 選

片山由美子 選

小川 軽舟 選

川舟の影がよる水の秋

東京 望月 清彦

△評▽平明な言葉で存在のはかなさを表現した。船でなく「舟」、「秋の水」でなく「水の秋」である点も味わいたい。

甲板上に酔客集ふ月今宵

相模原市 はやし 央

△評▽夕食後、甲板に出たら見事な満月。月見を目的とした客ではなさそうところが面白い。

月なきに月を称へて踊りけり

兵庫 小林 恕水

古里の空の辺りの遠火花

京都市 古川麻美子

吾亦紅引つ詰め髪の母若し

野洲市 宮田絵衣子

虫送り果て一村に闇戻る

弥富市 富田 範保

いつしかに虫鳴く夜々となりけり

千葉市 高橋 信子

名残とは見えぬ紅さす酔芙蓉

東京 鈴木 智子

新涼や一句授かる国境

豊橋市 岡野寛十郎

子の数の減りしと言へど地蔵盆

奈良市 奥 良彦

菊香る父に短き俳句歴

東京 吉田かずや

△評▽菊の香が、長寿で健やかな父親を祝っている。その父が一時俳句に親しんだことが、父の人生を豊かに彩っている。

フランスにトリュフ日本に今年米

鎌倉市 小川 求

△評▽トリュフと新米の色と香と、宝石に例えられる秋の美りをたたえる。洋の東西の対比が軽やか。

胡弓弾く指の太さよ風の盆

富士市 後藤 秋臣

叱られてしゃくり泣く子や鳳仙花

東京 徳原 伸吉

老いの夢句作にありてほととぎす

唐津市 梶山 守

日蓮の入寂の地や暮の秋

越谷市 安居院半樹

畳み置く漁網の嵩も涼新た

下松市 九内 千沙

ひぐらしや水たつぷりと百の鉢

朝倉市 鳥井てんせき

重なりて重なりて消ゆ大火花

久留米市 持地 恒美

生家は空き家色変へぬ男松

和歌山市 福本 秀昭

泡吹いて砥石水吸ふ秋早

土岐市 水野 雅子

△評▽急激に水を吸う砥石が泡を吹くというので、いかに乾いていたかがわかる。夏とは違う秋の日差しに思いのほかの強さ。

悪口もひとつかふたつ通夜の月

奈良市 荻野 隆子

△評▽通夜に集まった人々が故人の思い出を語っているのだが、「悪口も」に親しさがうかがえる。

しるるるや尾灯やがては闇の中

大阪市 杉田 富代

虫時雨びたりと止んでしまひけり

さぬき市 景山 典子

サイレンの遠く近くに熱帯夜

東久留米市 矢作 輝

人の世の騒ぎをよそに稲の花

大阪 池田 壽夫

百合の香の強きに窓を開けにけり

福岡 手島喜美江

新米のとき汁で拭く廊下かな

入間市 木嶋 務

傷口のやうなゆふぐれ鳥渡る

加古川市 石村 まい

秋草を乱るままに壺に生け

枚方市 門川 清秀

秋晴の美術教師の初個展

宮崎市 境 雅子

△評▽学校の教師をするかたわら、自分の絵もこつこつ描きためてきたのだ。画家にならなかった昔の夢を思い出す。

秋暑し五年日記も終章に

奈良市 大塚 裕子

△評▽その5年が一篇の小説のように思えてくるのだろう。もうすぐ次の5年が始まる。

霧書し金剛杖の荒法師

さいたま市 池田 雅夫

バーボンに秋の灯が溶け地下酒場

甲府市 村田 一広

軒先に籠の無花果二百円

橋本市 米澤 俊江

赤い羽根付けて胸張る男かな

野田市 塩野谷慎吾

鈴虫の餌とりかへて日の終はり

立川市 大西 信子

流星と叫べばみんな上を向く

新座市 睦月くらげ

浄土より遙けき旅路門火焚く

松戸市 鳩貝 俊

喫議書の脱字見つけし夜寒かな

伊丹市 山田 翔太

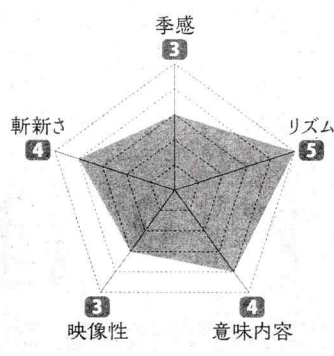
俳句てふてふ

注目の一句

朝顔の話しかたなくなるかたち

紀恵

チャートで採点



円堂実花

アプリ「俳句てふてふ」の週間ランキング1位を獲得した、季語「朝顔」の一句。夏のイメージがある花ですが、暦の上では初秋の季語です。掲句になんとも言えない説得力を感じるのは、朝顔の形が伝声管を連想させるからでしょうか。伝声管とは、金属などの長い管の両端に、漏斗状の受話器兼拡声器を取り付けたもので、かつては大型の船舶や工場で通話用に使われていました。現在では科学館や美術館に展示されていたり、公園の遊具に設置されていたりしますが、確かに見つけると話しかけてみたくなります。その構造は耳にも似ているので、伝達本能が刺激されるのかもしれない。(えんどう・みか「俳人」)

アプリ
俳句てふてふ

全国景勝地俳句コンテスト 俳句てふてふは富士五湖や耶馬溪など133景勝地にちなんだ俳句を募集中。1930(昭和5)年に高浜虚子選で実施した「日本新名勝俳句」の後継企画。選者は俳人の稲畑寛太郎さんと星野高士さん。詳しくはアプリ内の応募要項をご覧ください。



アプリのダウンロードはこちら